

名著に学ぶ経営 ～ その：2 西洋ならマキャベリ

西洋の書物で東洋の孫子に匹敵する書物といえばニコロ・マキャベリの「君主論」くらいであろうか？ 権謀術数の書などと言われ冷酷無比な非情の書のように扱われることも多いが、実際はどうやって自分の国が生き残れるかを真剣に説いた、純粋な使命感に貫かれた書である。日本の戦国時代よりやや前の16世紀初頭、イタリアの都市国家フィレンツェ共和国は、同じイタリア内のヴェネツィア、ミラノ、ナポリ、そして教皇が治めるローマと戦いや駆け引きを繰り返していた。そんな中、周囲の大国フランス、ドイツ、スペインがイタリアの小国を一機に飲み込もうと狙っていた。そういった中、フィレンツェの外交官だったマキャベリが、イタリアをうまくまとめ上げて大国に伍することができることを願いつつ書いた書、それが「君主論」である。

内容は大きく二つに分かれ、前半は国の形態ごとにどのようにしたら生き残れるか、後半は君主にはどのような人物がふさわしく、またどのようにふるまうべきか、歴史上の人物や当時の人物をもとに述べている。国の形態とは世襲の君主国、征服によって手に入れた国、一人の君主による国家、君主に加え諸侯からなる封建的な国家、自分の武力や力量によって手に入れた国家、他人の武力や運によって手に入れた国家、すなわち現代の会社に置き換えると、親から引き継いだ会社、他の会社を合併した会社、ワンマン社長による会社、いくつかの会社の連合体、自分で一から創業した会社、何らかの理由で引き継いだ会社といったところか。また、傭兵や援軍の賛否についても述べられているが、今で言えば派遣社員と外注といったところである。歴史上の国々を例にそれぞれの優劣を論じているが、現代の会社に置き換えてもまったく違和感がなく、それぞれの対処の仕方について非常に参考になる。

一方君主については、鷹揚か吝嗇か、冷酷か憐れみ深いかなどの優劣を論じ、さらに憐れみ深く見せかけて冷酷であれなどと説いてもいて、これこそが権謀術数の書「君主論」たる所以であるが、こちらはさすがに、現代にはそぐわない面もある。理想の人物としてモーゼ、キュロス、ロムルス、テセウスなども例に挙げているがこれらは到底近寄り得ない伝説的な人物であり、ヴァレンティノー公チェーザレ・ボルジア、教皇ユリウス2世、スペイン王フェルナンドなど力づくでのし上がった、当時の実力者を現実的な手本としている。彼らにしても、相手を騙すなど、現代の倫理観からは受け入れがたいものもあるが、今にも大国の手に落ちようとしていた自国を守るには、理想的な人物を待つより、現にいる人物を頼みにするしかなかったのであろう。最後に、フォルトゥナ（幸運）に頼るのではなく、ヴィルトゥ（意志）で道を切り開くべきだと説く。会社に置き換えれば、好景気に依存するのではなく、製品開発や新規開拓で受注を伸ばすべきことという事になる。

我々中小企業をみても、そんなに完璧な経営者などありえない。自分の強みを生かし、弱点は周りの人員にカバーしてもらおうのがせいぜいである。そんな状況の中で素晴らしい理念をもって理想的な統治をするような立派な君主ではなく、国が危機に瀕する中、欠点だらけながらもしぶとく生き残っていくような君主の方が手本になるものである。

